新鋭詩人発掘の方法

－平成時期における新鋭詩人 Project 管見－

中村 不二夫、平居 謙

0　はじめに

平成が終り、令和に元号が改正された。今にして思うと、平穏だったのは 2019 年の 5 月から半年余りの事に過ぎず、その後はコロナ禍の中に日本のみならず世界中が置かれることとなった。さらにはロシアによるウクライナ侵攻、安倍元首相銃撃事件とそれに端を発した旧統一教会による企業・政界汚染の実態露呈…混乱の極みの中で、時代を冷徹な目で批評し記録する行為としての「詩」の役割は今後ますます重くなるであろう。

大学の人文学部全盛のころならいち早く「平成詩史」といった類の本が教科書として現れてもよさそうなものだ。しかし詩史はおろか文学史（小説史）すらも一向に姿を現す気配がない。そこで平成詩史を記そうと考えた。自分が読んできたものについて書くだけであれば単なる「読書体験記」に過ぎないと考え、信頼できる 10 人前後の私的な小さな研究会を企画した。それぞれがどのような詩人の詩集を読んできたか、どんな詩人に興味を持っているかを聞き取り、さらにどのような詩人たちに意見を聞くべきかなどの基本的な作業を一通り終えた。その頃になって「意見聴取を延々と続けても巨大なアンケート結果の集積にしかならない」ことに気が付いた。研究会を始動させるにしても核になるテキストの類がいるだろう。例えば「現代詩手帖」の「戦後詩○○年特集」のようなものを敲き台にして重要な詩集を読み進めることも可能だ。だが、そこには社としてのイデオロギーが強く働く。そういうものを信用できないから研究会を立ち上げるのであって、出版社カタログを読むようなことをしても意味をなさない。それで堂々巡りではあるが一旦切り捨てた「自分自身の読書記録」をもう一度引きずり出した。そしてそれを再度厳正にチェックした。１つの出版社主体では決して見渡すことのできない『平成詩史試論』（仮）をまずは本稿筆者の 1 人である平居自身が単独で作成し、その上で研究会を本格的に始動させるべきであると思い直した。『平成詩史試論』（仮）では、平成時期に第 1 詩集を刊行した詩人に焦点をあてるという形で、まずは限定的ながら 1 冊を書き上げる計画を遂行中である。

幸いなことに、諮問委員会顧問の一人として本稿の共著者中村不二夫氏が参加してくださった。詩人・中村不二夫は日本詩人クラブの顧問も務め、昭和・平成・令和と脈々と続く時代の書き手たちの様相を鋭く見続けてきた批評家でもある。同時に、彼が平成の始まった当時参画していた「叢書 21 世紀の詩人たち」からは若い書き手達が大勢出発を果たし、文字通り新しい詩の息吹を感じたものである。後述するように筆者自身も同叢書にお声かけ頂いたが、諸般の事情で、別の出版社から詩的出発を果たすことになった。

本稿ではその中村不二夫に「叢書　21 世紀の詩人たち」「新鋭詩人叢書」等の（株）土曜美術社出版販売より平成時期に刊行された「新鋭詩人発掘 Project」に相当するものを改めて振り返っていただく。加えて平居が 2001 年を挟んで刊行した 20 代 30 代の若い書き手に特化した『脳天パラダイス』シリーズというアンソロジー、その後の詩書出版「草原詩社」という Project を客観的に批評いただき、その史的位置づけの根拠としたいと考えた。土曜美術社出版販売以外の詩書出版社、例えば思潮社・ミッドナイトプレス・七月堂・青土社などから平成期第一詩集を出した詩人の中で注目すべき書き手

について批評を請うた。

本稿は「0　はじめに」「第２章」「おわりに」を平居謙が、「第１章」「第３章」「第４章」に関しては中村不二夫が執筆し、各章末に筆者名を付した。（平居謙）

１　９０年代「21 世紀詩人叢書」及び「叢書新世代の詩人たち」のコンセプト

1-１　小海永二と「詩と思想」

「詩と思想」[*1] は月刊全国誌として、全国の読者を対象とする投稿作品欄、年１回の「詩と思想」新人賞、それに対面方式の「詩と思想」研究会など、つねに新人発掘に力点を置いていた。研究会について、対面方式が固定化したのは、1989 年３月に小海永二が編集長に就任してからで、それまで土曜ポエムナイトのような不定期の朗読会などはあったが、合評方式の研究会はなかった。「詩と思想」研究会でイメージしたのは、筆者が 1970 年代半ばから 80 年代にかけて参加していた嵯峨信之主宰の「詩学」研究会であった。複数の講師を前面に出した合評方式のノウハウを使い、「詩と思想」研究会の立ち上げに転用した。1990 年代に入り、「詩学」[*2] は岡田幸文、篠原憲二編集長に交替し、それまでの生硬な戦後詩的イズムを脱皮し、二人の個性はちがっても、ポストモダン的ともいうべきポップ路線に方向転換しつつあった。それでも、「詩学」は新人育成の本家本元として、毎年定期的に投稿欄選者によって、有力な書き手を詩界に送り出していた。篠原の後任、寺西幹仁編集長になると、それまでにはないポエム・マーケットの開設など、さらに編集内容が岡田や篠原以上に戦後的な思想詩から乖離していく。嵯峨信之が編集の実務を離れたのがいつかは分からない。1980 年代半ば位からであろうか。鋭敏なジャーナリストの目をもつ嵯峨は、もう自力で戦後詩を全面に押し出す編集は難しいと判断し、小田久郎の「現代詩手帖」[*3] の動向を睨み、岡田幸文や篠原憲二の次世代に後を託した。その時点で、「詩学」に限らず、「荒地」「列島」中心の詩壇ジャーナリズム的な基軸は揺らぎ、90 年年代に入ると、さらに戦後詩の終焉は現実味を帯びてくる。本来、そこに行くまでに、筆者は 60 年代詩の総合的な検証があるべきとの見解を持っている。60 年代詩は一部言語至上には向かったにしても、平居謙の研究対象である吉増剛造はじめ、戦後詩を創造的にリノベーションしたことの功績は大きい。

「詩と思想」は表向き「列島」「現代詩」の系譜には立つが、意外に戦後リベラル思想からの影響は少ない。90 年代、編集長に就任した小海永二はロルカ、ミショーの翻訳者にして戦後詩の紹介者、さらに学校教育の現場にも影響力を持つというマルチな詩人で、「列島」の近くにはいても、串田孫一の系譜に立つ保守的抒情派であった。

当時、小海に招聘されたのは森田進、佐久間隆史、葵生川玲、麻生直子、小川英晴と中村不二夫。編集会議は戸塚の小海永二宅でお昼を挟み、夕刻まで行われた。小海は自宅の二階に図書館のような巨大な書庫を持ち、そこから瞬時に必要な資料が取り出されてきたことに一同驚かされた。二万冊を超える本や雑誌の置き場所がすべて頭に入っていたのである。その書庫をみて、だれもが小海が詩界のオーガナイザーとして斯界に君臨していたことに納得がいった。

90 年代以降、詩界は三極化したとみている。一つは「荒地」を軸に戦後詩人を擁した「現代詩手帖」の動向。戦後詩の終焉を察知し、小田久郎は吉増剛造、入沢康夫などの 60 年代詩、ニューアカの「麒麟」、さらに吉本隆明いうところのゼロ年世代を誌面に登場させて、読者を飽きさせなかった。もう一つの極、「詩と思想」は地域性、国際性を前面に押し出し、全国の詩誌との活発な交流、海外詩文庫の刊行、韓国などアジアの詩人たちとの交流を強めていく。小海の後、編集長に就いた森田進は群馬のハンセン病療養所の実作指導をしていたことから、ハンセン病詩人に光を当てた。とりわけ、NHK のドキュメンタリーで取り上げた桜井哲夫の存在は大きかった。

三つめの極は、全国誌ではなく、個人誌から発展した詩界メディアで、「詩学」を離れた岡田幸文は「ミッドナイト・プレス」を創刊。平居謙は「Lyric Jungle」の刊行と併行し、草原詩社を設立、モダニズム詩の研究者の顔をもちながら、前例にとらわれないゲリラ的展開をしていく。その内容については後述したい。ここでは、まず平居の研究者としての側面を伝える研究誌を紹介しておきたい。高橋新吉研究「甲板」の創刊は 1989 年 8 月。創刊号に日高てる「留守と言え - 高橋新吉のこと -」、中村光行「高橋新吉の桃」、平居謙「高橋新吉における＜キリスト＞の問題」、2 号に中野嘉一「随想 - 詩人と心理學者 -」、倉橋健一「『ダダイスト新吉』小考」、和田博文「詩画集というコンセプト　-「古賀春江画集」の文脈」、平居謙「自己救済の詩法　- 戯集・日食の救い -」など、興味深い論考が収録されている。

小海永二は内外の現代詩研究者の育成にも着手し、1992 年 4 月、相沢史郎、石原武たちとともに、日本現代詩研究者ネットワークを設立する。すでに斯界の権威となっているベテランから、中堅・若手の現代詩研究者が集った。後に平居謙も参加している。この会の特徴は、リース・モートン (オーストラリア)、金光林、権宅明 (韓国)、陳千武、杜國清、陳明台 (台湾)、ジェイムズ・R・モリタ (アメリカ)、エドワード・クロッベンシュタイン (スイス)、ロバート・エップ (アメリカ)、P・アッカーマン (ドイツ)、羅興典 (中国) などの海外の日本現代詩研究者が会員に参加していたことである。90 年代詩以降の側面として、こうした現代詩研究の高まりは特筆しておきたい。

1 - 2「21 世紀詩人叢書」

これは 1 で述べた「詩と思想」の具現化の一つであった。小海が提案し、小川英晴が企画し中村不二夫が呼応し、「詩と思想」の運動に共感してもらえる中堅詩人について出版を呼びかけた。

その趣旨を紹介したい。

> 現在、詩の世界においても様々な価値観の詩が存在し、詩の評価をめぐっても様々な論議が繰り広げられている。しかし、ともすればそれらは特定の流行、流派に評価が収斂し、全国の全世代への普及を考慮に入れたとき、必ずしも満足のいく結果が出ているとは判断し難い。こうした状況に切り込んでいこうという意気も込め様々な魅力を持った詩人たちの詩集を「２１世紀叢書」として広く紹介していきたい。これらの対象となる詩人は、すでに数冊の詩集を持ち、またさらに活躍が期待される真に実力がある詩人たちである。叢書の巻末には、有力詩人による書き下ろしの詩人論を入れ、読者が詩人の全体を理解していく上での一助とする。
>
> 参加詩人 (1990 年―1999 年)
> 1990 年 = 望月苑巳、小川英晴、藤田晴央、中村不二夫　1991 年 = 江島その美、絹川早苗、日原正彦、北畑光男、紫圭子　1992 年 = 佐々木洋一、成田敦、谷崎真澄、なんば・みちこ 1993 年 =　たかとう匡子、下村和子、尾世川正明　1994 年 = 森野満之、白川淑、坂井信夫　1995 年 = 飯島章、井口克己、久保寺亨、沢聖子、溝口章、高畑耕治、所立子、日高滋　1996 年 = 水野ひかる、新延拳、山田隆昭、みくも年子、今駒康成、麦田穣、永見哲見　1997 年 = みもとけいこ、北岡淳子、小野恵美子、神崎崇　1998 年 = 川上明日夫、斉藤征義、清岳こう　1999 年 = 原田道子、大塚欽一、前原正治

上記に該当するイメージは年齢的には 40 代から 50 代、それに詩界での将来の飛躍を加味しての人選であった。装丁に司修を起用し、さらに全国的に知名度の高い詩人の解説も付け加えた。美大出

身の社主にして編集者の加藤幾恵の渾身のシリーズであった。

この企画は 50 冊で一期を完了、二期で他の企画と交替する形で 38 冊を出して完了。

本シリーズは山田隆昭『うしろめた屋』のH氏賞はじめ、全国的な受賞詩集も多い。とくに 2000 年代に入り、このシリーズ参加者が「現代詩手帖」などの全国誌の誌面を飾ったことも成果の一つにあげてよい。

「詩と思想」は 2022 年で創刊 50 周年を迎え、10 月号で全面的に特集を組んでいる。この中で、小川英晴がつぎのように書いている。

> 今日、「詩と思想」新人賞受賞者をはじめ、いく人かの詩人が「現代詩手帖」に登用されるようになったのは良いことだと思う。(略) ひとつの指標となるべきものを個人として持つことは当然だが、さまざまな思想とスタイルの異なる詩人が「詩と思想」の誌面をにぎわせることは重要なことだと思う。 (小海永二と「詩と思想」)

本企画の立役者の率直な意見である。団塊の世代を軸に、物理的年齢ではなく、将来の伸びしろを意識した編成であった。つまり、ここで小川のいうように、詩人たちにもっとも影響力をもつ「現代詩手帖」や販売元の思潮社に有力な人材を送り出せたことは、このシリーズの面目躍如たるものがあった。「詩と思想」の企画であっても、出版社の囲い込みは閉塞を招くことになり、企画段階で小川とはなるべく詩人たちに本誌の色を付けないように配慮したことも裏話として記しておきたい。

小川は編集委員として、美術界や音楽界に広い人脈をもち、90 年代、独特の感性で「バッハ」「現代の美術」「ロルカ」「スペイン＆フラメンコ」など斬新な特集を組んでいる。小川は今道友信の美的概念に共感し、言葉を現代詩本体に押し込めず、いわばポエジーなる普遍的なものを、すべての芸術に共通する概念として広く万人に解放しようとした。

1 - 3「叢書新世代の詩人たち」

「21 世紀詩人叢書」と同時に企画された姉妹版シリーズ。同じく小川が企画し、私がそれに意見を重ねて編集委員会に提出した。参加者は、「詩と思想」編集参与が推薦する詩人、「詩と思想」研究会参加の詩人などである。企画の趣旨は「２１世紀詩人叢書」を一世代若くしたか、既刊詩集が少ない詩人を対象とした。

> 参加詩人
> 1990 年 = 萩原里見、陣内淳介、篁久美子、中島悦子　1991 年 = 北村瑠美、井村たづ子、栗原俊、成見歳広　1992 年 = 幸田和俊、上村多恵子、西田純 1993 年 = 竹生淳、永井力、安藤一雄 1994 年 = 細野豊　1995 年 = 萬屋雄一、太田昌孝、芳賀稔幸、西野りーあ、田中俊彦、長谷川忍 1996 年 = 麻生秀顕、星善博 1997 年 = 若宮明彦、林ひろみ、1998 年 = 臺洋子、藤井雅人

本シリーズも 2000 年代に向けて、「現代詩手帖」はじめ、多彩な人材を詩界に送り出すことに一定の成果をあげた。こちらも「21 世紀詩人叢書」同様、すべての詩集に詩人論の解説を加えたのが読み手の有効な手引きになった。叢書全体をみていくと、後にラテンアメリカの翻訳で知られた細野豊、同じく『水葬の森』で日本詩人クラブ新人賞を受賞した星善博などがいる。

「叢書新世代の詩人たち」の中には、後述する「詩と思想」研究会から送り出された詩人がいる。「21 世紀詩人叢書」とともに、今からみれば「詩と思想」は詩界の未来に大きな種を蒔いていたといえる。

二つの叢書には習熟した詩人が解説を書いていて、これは功罪相半ばであったとしても、近年途絶えがちな詩壇の存在価値という意味も継承された。戦後「荒地」が戦前の詩人を愛国詩関与で否定したことで、いわゆる詩壇は解体し、日本現代詩人会[*4]、日本詩人クラブ[*5]などの結社はあっても、もはやどこにでもある親睦団体に一つにすぎない。これは疑似的な詩壇といってよいが、他に詩誌の主宰者、地域の詩人団体の役職に就いている詩人もここに当て嵌まる。新人の立場からみれば、詩壇を前時代的で過去の遺物とみる傾向がつよく、いわば、現在の詩の世界に詩壇など在って無きがごとき存在である。若い世代に特定せずとも、詩壇はヒエラルキーを形成する傾向にあり、反権威、非体制をモットーとする詩人たちからみれば俗物的で無用の長物でしかない。

強いていえば、現在中央に「現代詩手帖」という一強の仮想詩壇があり、それにアンチを突き付けている「詩と思想」という地域グループがあるといったイメージか。「現代詩手帖」の有力執筆者は、現代詩人会や詩人クラブに属さず、直接詩壇メディアや結社が主催しない各賞の選考委員とつながっている傾向がつよい。「詩と思想」をみていくと、小海永二が現代詩人会の理事長、会長を歴任したことから、その影響を受けた編集委員たちの多くは詩人団体の役職に就いている。よって、誌面には権威的かつ保守的傾向がつよい詩人が書いているイメージがつよい。

1-4　「詩と思想」研究会

前期「詩と思想」研究会初期を担った主なメンバーはつぎの通り。

陣内淳介、幸田和俊、成見歳広、平居謙、麻生秀顕、萬屋雄一、中島悦子、藤井雅人、船木倶子、井村たづ子、琴天音、鈴木正樹、中村友子、窪田洋子、村田春雄、何積橋、浜江順子、長谷川忍。花籠悌子、金谷量三、高畑耕治、大森隆夫、吉川睦彦、小野恵美子、松浦成友、亀川省吾、大瀬孝和、芳賀稔幸、長尾雅樹、李美子、水島美津江、堀口精一郎、堀内みちこ、山岡遊、岩本　　勇、アーサー・ビナード、桜井さざえ、竹内美智代、船木倶子、安藤秀一、中村洋子

ここにはレギュラーではない詩人もいるが、これは 1995 年までの参加者名簿からみた一部記録である。当初は夕方から開始、九時前後に終わり、それから懇親会場に行くのだから慌ただしい。終電近くになっても話は尽きず、平居謙も当時「詩と思想」に講師の佐久間隆史宅に宿泊したと書いているが、まさに合宿ゼミの様相を呈していた。

研究会メンバーの中から出た、陣内淳介『底なし水差し』、成見歳広『厨房のマリア』は当該年度の日本詩人クラブ新人賞の有力候補。麻生秀顕『部屋』は福田正夫賞。同叢書から『Orange』を出した中島悦子はのちに『マッチ売りの偽書』で H 氏賞を受賞。長谷川忍は現在「詩と思想」編集委員として活躍している。「詩と思想」研究会と「叢書新世代の詩人たち」がスクラムを組み、効果的に若手詩人を詩界に登場させたといってよい。

ここで、「現代詩手帖」推薦の詩人も紹介しておきたい。1990 年 8 月号は「現代詩の前線・新人特集」。

小沼純一、小島数子、北爪満喜、北交充征、川端隆之、河津聖恵、川口晴美、加藤温子、生田梨乃、雨矢ふみえ、阿部裕一、阿部日奈子、芦田みゆき、浅見洋二、阿賀猥、渡邊十絲子、柳内やすこ、守中高明、宮下和子、松井信弥、堀江沙オリ、藤本直規、秦愛子、長谷部奈津江、野村喜和夫、中森美方、中村ひろ美、中村えつこ、中川千春、時里二郎、田野倉康一、田中庸介、高屋優子、高階杞一、高岡淳四、川村泰子

これを読むと、60 年代詩、70 年代詩は「現代詩手帖」が新人発掘の中心であったが、80 年代を経て、90 年代以降は、詩壇ジャーナリズム周辺は混沌としてきた。いわば、詩壇の登竜門の多様化の始まりだったといってもよい。

本来、詩壇の登竜門といえば「詩学」であった。こちらも、1990 年から 1992 年までの「詩学」新人を紹介しておきたい。

1990 年 = 引間徹、岡野汎、貞久秀紀、新井啓子、寺下昌子、田中郁子
1991 年 = 佐藤真里子、近藤久也、相野優子、山本泰生、松田加奈、井村たづ子、筒井和子
1992 年 = 大川晃、千坂労、中島公代、田口よう子、石井かずお、林舜

「詩と思想」「現代詩手帖」「詩学」は、スタイルこそ違っても表玄関から詩壇に入っていくコースといってよい。この先、日本現代詩人会、日本詩人クラブに入会する詩人もいて、これらが大集団となって機能している。2022 年現在、これら当時の新人たちがどれだけの活動をしているのか、その辺りの評価は定めにくい。ある意味、詩の世界全体がアナーキー化しているといってもよい。その背景に、新人が三誌以外から、たとえばネット詩や朗読パフォーマンスなどの他、個人誌や同人誌から出てくることも可能になったこともある。

1 - 5 「詩と思想」新人賞

「詩と思想」新人賞の再開は第 8 回の 1999 年で、全国各地の推薦委員が各一篇を推薦し、それを最終選考委員の辻井喬、新川和江、松永伍一受賞詩人一名を選んだ。その後、公募制が取り入れられ、現在に至っている。「詩と思想」の投稿欄、研究会とはちがった応募者があって、こちらは正賞に詩集が企画出版されることで、にわかに注目されることになった。第 8 回の清岳こう以降、伊藤啓子、江口節、渡辺めぐみ、三島久美子、中堂けいこ、中村純、林木林、橋爪さち子、加藤思何理、伊藤浩子、岡田ユアン、小野ちとせ、永方ゆか、為平澪、花潜幸、青木由弥子、及川公哉、佐々木貴子、草間小鳥子、黒田ナオ、雪柳あうこ、勝部信雄が受賞している。歴代選考委員は小海永二、木津川昭夫、磯村英樹、相沢史郎、森田進、高良留美子、郷原宏、葵生川玲、岡島弘子。

ある意味、「詩と思想」は多彩なメニューで、新人を世に送り出す公器としての役割を果たしてきた。2022 年現在、「詩と思想」研究会はコロナ禍で対面方式が一部中断され、リモートや文書通信が導入されている。それによって、遠距離に住む人たちの参加が可能になるというプラス面が促進された。新人育成にもう一枚、強力なカードが加わったというべきか。現在の研究会講師は中井ひさ子と花潜幸。事務局は長谷川忍と青木由弥子。

以上、筆者の属する「詩と思想」周辺に絞って新人発掘の方法について論じてきた。つまり、これらは全体のほんの一部の詩界的現象に過ぎず、まだまだ詩の世界全体の見取り図にまで至っていないことを自覚している。戦後詩史や昭和詩史は資料も多く、戦後詩的秩序があって、まとめるのにさほど苦労はいらない。ただ、平成以降となると、自動車で濃霧の中を進んでいくような感覚がして、皆目全体像が浮かんでこない。平居謙に「詩と思想」周辺の動向を伝えたにすぎない。平成以降の著名詩人とはだれか。まったくいないと言っては言い過ぎだが、そう言ってもあながち間違いはないような思いもする。いわば、平成詩壇は、戦後詩や 60 年代で活躍した詩人たちの貴重なレガシーを、ただ取り崩していただけで、平居謙のように自力で新たな価値創造には向かわなかったということが推察できる。平居謙の登場は、そうした詩壇の硬直化が生みだした必然といってもよい。あるいは、閉塞を打破する果敢なチャレンジといってよい。何か詩壇という配管が経年劣化で水の通りが悪くなっ

てしまっている。（中村不二夫）

2「脳天パラダイスシリーズ」「草原詩社」のコンセプトと実際

2-1　関西詩壇の体験

1980 年代の後半、本項の筆者（平居）は、関西の詩壇と漸く関りを持ったばかりであった。関西学院大学大学院で近代詩の研究者を目指し論文を書いた。それと並行して詩作品を同人雑誌に発表し始めていた。非常勤講師として母校の高槻高校に勤めたが、その学校の図書館に刑部あき子という詩人が図書館司書として勤務しておられた。彼女は筆者に「国語の先生だった詩など書かれますか？」と声を掛けてくださり、早速福中都生子が編集している『大阪詩集』というアンソロジーに掲載いただくことになった。また同時に福中の「陽」という同人雑誌に入ることにもなった。

出来上がって来た『大阪詩集』（1988 年）は異常に分厚いもので、253 名もの書き手が参加していた。しかし同世代はほぼ皆無で、掲載されている作品もさしたる刺激のないもののように感じ僕は少し失望した。だがその出版記念パーティの二次会で誘われた会員誌「BRACKT」は、村岡真澄・松本衆司ら当時 30 代の書き手たちが始めたばかりの海のものとも馬の骨とも分からぬ雑誌だったが、文字通り随分雑然として楽しそうなものであった。「福中さんの「陽」に入るという約束しちゃってるんです」と言うと「そんなの両方やったらええ」と言われその場で「BRACKT」にも入ることにした。「プロレスと詩とどちらが面白いか！というテーマで詩を書いてゆきます！」と筆者は宣言し、メンバーたちも大いに拍手喝采で迎えてくれた。

その後どこで出会ったのだったろうか。「月刊　近文」という、ちょうど「詩学」と同じような装丁の本を出している伴勇という人と出会い、それにも書く事になった。2 つも入っているのでお金がないというと、「新人はタダや」と毎号作品を招待してくれたのであった。彼は VAN 書房という書肆を持っており、小さな文庫サイズの詩集や「日本詩人叢書」というシリーズも出していた。いろんなところで出版記念会があるとそのたびに連れて行ってくれて「今年の新人です！」と紹介された。彼は画商に模して自分のことを「詩商」と呼びならわしているようであった。一年の半分はスキンヘッド、髪が伸びてきたらまた切る、という不思議なスタイルは生き方にまで響いているようであった。何か月か載せてもらった後、急に封書が来て「掲載はこのあたりにしておきましょう」と書かれていた。何か、自分の作品の質が落ちたのだろうかと心配になって電話したことを覚えている。伴は「いや、そんなわけではないんや」とお茶を濁した。あとになって考えてみると「これだけ無料で招待したのだから今後は有料で参加して会を支えて欲しい」という事だったのかもしれない。しかし彼はそのようなことは一言も言わなかった。まだ詩の世界の何たるかを知らない若い書き手は、不安と失望を抱え込むことになった。これは後々、若い書き手と関わる時にデリケートな問題としていつも頭に浮かぶことである。若いから確かに参加費用などを捻出できないことが多い。サポートするのは簡単だ。しかしそうすることによって、詩を書く覚悟が形成されないようなことも起こる。もちろん、小説や音楽の世界のように、開かれた頂点が明確に見え、あの関門を突破すれば職業として成立する、ということであれば「それまでの間は」というような感じで優遇して育てることも可能だろう。が、現実はそうではない。

その少し後、詩集を企画で出してくれる出版社を中野嘉一を通して山田野理夫に頼んでもらったりしたが、今考えると厚顔無恥なふるまいのようにさえ響く。中野嘉一は前衛詩研究家で、筆者が高橋新吉研究のための小さな研究誌「甲板」というのを出した時に書いてもらったことがあった。その関係で彼の「暦象」という同人雑誌に暫く書いていたことがあったが、その伝を頼ってのことだったように思う。法文館やその他心当たりを当たってもらったが、どこの牛の骨ともわからぬ無名の新人の

詩集を好条件で出版してくれるようなところがあるはずもない。　そのような経済と現実との間で受ける小さな衝撃と失望を通して少しずつ「詩の環境」というものを理解してゆくというのは多くの書き手が体験するプロセスであろう。筆者は大学時代に卒論を書きながら「詩人というのはどうしてこう、教師が多いのだろう」などと考えその結果、詩の消費財としての不可能性を理屈としては分かっているつもりであった。にもかかわらず、現実に直面するとどこか自分自身の人生が閉ざされたような感じさえ受けたのであった。

2-2　詩と思想研究会の頃

伴に連れられ、あるいは「陽」や「BRACKT」周辺の出版記念会などに出ていると、どうもそれが極めて狭い世界であることが分かってきた。どこに行っても－全く同じメンバーではないにせよ－必ず知っている書き手に出会うようになったある日、筆者はそれにゆくことをすっぱりと止めた。その代わり東京の「詩学」の会や、土曜美術社から出ていた「詩と思想」研究会に通うことにした。月例で東京に出ることはなかなか覚悟が必要であったが、新しい書き手達との交流は関西の同じメンバーに早くも倦んでいた筆者にとって極めて新鮮なものであった。

「詩学」の会は参加者が大勢いて活気があった。嵯峨信之ともう一人か二人が前に出て、事前に送られて来た作品を講評し、次々にこなしてゆくというスタイルであった。それに対して詩と思想の作品研究会は参加者自らが意見を交換する合評会形式だった。両方を覗いた時期もあったが、結局後者の方に絞った。名前をよく知っていた嵯峨信之を実際に見たり喋ったり水餃子を喰ったりするのは楽しかったが、より若く活気のある詩と思想の会が気に入っていた。そこには森田進・葵生川玲・佐久間隆史・中村不二夫・小川英晴などが講師として活発に意見を述べた。東京に一年だけ住んだことがあってある程度馴染んでいたとは言え、生活のベースが関西弁であった筆者には、彼らの使う言葉が威勢のいい所謂「江戸っ子弁」にさえ聞こえた。作品の欠点も遠慮せずずばずばいう小気味よさが気に入って何年かの間積極的に通った。この会を知ったのは、大学院の指導教官であった中島洋一という研究者から日本文芸学会という学会の二次会の席上で「この人は森田進さんと言うてな、詩の雑誌をやってはるんや」と紹介された、そんなことが始まりだったのだと思う。その後、高橋新吉論を詩と思想に送ったが「まだまだですね」というような反応で失望したこともあった。しかしそういうやりとりの中で信頼関係が培われていったのではないかと思う。

本稿前節で中村不二夫が書いているように1990年代には「叢書新世代の詩人たち」が出されていて、当時の研究会で親しかったメンバーたちが何人もそこから出している。陣内淳介・成見歳広・麻生秀明・長谷川忍・萬屋雄一などの詩集がリストアップされているのを見て、自分もそこから出せばよかったと少し悔やんだ記憶がある。当時筆者は先述の高橋新吉研究「甲板」を発行していて、その顧問に俳句の坪内稔典になってもらっていただいていたのだったが坪内が「京都の白地社なんてどうですか、詩集」と薦めてくれた。そのためそこで出す流れに既になっていたのだった。京都の小さな出版社でもそのような「新鋭詩人叢書」というような類をプッシュして押し出していた。

「白地社」での刊行に踏み切ったのは、上記のような現実的な事情もあったが、筆者が「詩と思想研究会」に対して強い愛着を持っていた逆説的な証であると思う。そのグループの中での人間関係も含めてとても楽しく思っていたからこそ「他の奴らとはちょっと違うことをしてやろう。」とわざわざ違うルートを選んだのである。筆者は常にそういうことをしがちな発想を持っている。本稿で彼らの作品を紹介したいとも思うが、それは本稿と並行して現在執筆中の『平成詩史試論（仮）』（コールサック社　2023年夏刊行予定）に譲ろうと思う。

さて関西の詩壇（のようなもの）には嫌気がさしていたが、先に書いた「BRACKT」だけは面白がっ

て参加し続けていて、編集の中心だった村岡真澄とも親しくなっていた。彼が後に詩書出版彼方社を起すと、またひとつ強い地盤が出来たような気がして当該グループの結束も固くなっていた。同誌のメンバーではなかったが、関西では頭一つ抜けて疾走し始めていた萩原健次郎や、同世代の細見和之、上村浩史、水野麻紀、大学院の同級生だった後に小説家になる田中哲弥、東京の樋口えみこらとの交流も少しずつ始まっていた。何か面白いことはできないかと、常に考える日々が続いた。

『異界の冒険者たち』『高橋新吉研究』等の、研究者としてのベースとなるべき詩書を書き終え、第2詩集『無国籍詩集　アニマルハウスだよ！　絶叫雑技篇』も出してしばらく経ったある日､何を思ったか街角の占い師に手相を見てもらった。占いなど全く信じる心を持ち合わせていないのであったが、戯れにそうしたとしか思われない。そうすると老婆は｢人を束ねることをしてごらん｣と言うのだった。そんなことが頭にのこっていたからだろうか、彼方社にある一つのアイデアを持ち込んで村岡真澄と実現に向けて動き出した。

2- 3　脳天パラダイスという視角

それは｢ゲテモノ詩人シリーズ｣という 10 冊の詩集シリーズであった。パフォーマーの小川てつオ・映画監督になった園子温・哲学者の細見和之・ミュージシャンの奥野祐子・｢混線ぺんてか｣の樋口えみこ・関西朗読界で気炎を上げていた上田假奈代・物語系の詩ならずば抜けて才能を発揮していた丸米すすむ（のちのマルコムシャバスキー）など、奇妙で得体の知れないメンバーの詩集を 1 冊ずつ出してゆくという企画であった。後に中村不二夫に少しだけそのことを言った時彼は「そういうメンバーは継続性が足りないですね、その年齢にしたらもう少し続けてやっていてもよいのに」と言われた。その時初めて、筆者が選び取った人たちの特性や自分が好きな詩人のある種の方向性と言ったものに今更ながらに気が付いて自分でも笑いたいような気持になったのであった。詩に一生を捧げる例えば高橋新吉や萩原恭次郎・草野心平といったような詩人たちに憧れて育ってきた。しかし実際に自分が魅力を感じるのは、一発屋もしくは完全なアウトロー。（上記のなかでは細見和之は詩一途とも言えるが同時に哲学研究と二足の草鞋でもある）。そういう「ゲテモノ」たちを束ねればこれは面白いのではないか、と思ったのであった。しかし、先にもすこし書いたが、そういう面白い詩人たちは金銭が用意できなかったり、たとえあっても自費で出すなどとんでもない、と高をくくったり。最初の何人かに呼び掛けた段階で頓挫しかけた時、「アンソロジーにしよか」と村岡か筆者か、どちらかともなく全部を 1 冊にまとめちまうという案が浮上し、話は一挙に進んだのだった。

『脳天パラダイス大詩集』は 1998 年の刊行。村岡真澄の彼方社から出た。その後筆者はシリーズ化を望んだが、何しろハードカバーで費用も大変なものであったので、彼方社は続投を断念。代わりに鹿砦社という関西の名うての芸能出版社から詩集を出すことになった。これは筆者が当該出版社で『ウルフルズ BANZAI 読本』というのを出していた関係で話が進んだのだった。その本の印税をいつまでも払わないので、その代わりに『脳天パラダイス大詩集』シリーズを年鑑で出すように少し凄んだ。社長は後にプライバシー侵害などの容疑で逮捕されたが、漢気のある人物で、ウルフルズの事務所から来たクレームも一切著者には被せず全面的に編集部で処理を済ませてくれた。詩に対して理解があったとは到底思われないが、ＰＯＰ文化―はるか前にバブルは崩壊していたが現在に比すると遥かに遊び心のある時代だったのである－の一環として詩を位置づけようという試みに社長は乗ってくれた。

もっとも、作品の提供側の方が、そういう商戦に向いておらず、心に届くポップスというよりもひたすらがなり続けられるカラオケの紙版という印象が払拭しきれなかったのだろうか（と今では想像する）。ある一定の波風を立てた程度にとどまったのは、客観的にみれば当然である。むしろ 2002

年まで芸能出版が懲りずに３冊もこの奇妙なアンソロジーを出し続けた事のほうが注目に値すると筆者は考えている。

彼方社版『脳天パラダイス大詩集』は平居自身による各詩人の既出詩集から秀作を選別するという形を中心にした。鹿砦社で出したものは、誰でも分け隔てなく特権意識なく新しい詩の世界を構築しようという試みであった。当時若い世代で流行していた朗読会の紙上展開のような気概でおこなった。

筆者が大阪の東通り商店街で、大阪ガスの文化行事の一環として2000年を挟んで２年間月例で行った「ポエトリーリーディングの夕べ」には、地下の小さなBarに毎回40人から50人の参加者で寿司詰めになった。寺西幹仁もよく視察に来ていた。鹿砦社版『脳天パラダイス』の刊行時期はちょうどこのイベントと重なる頃である。筆者がアンソロジーに誘っている書き手に寺西が「あんなものに参加すると色が付くからよく考えたほうがいい」と親身でアドバイスをしたという話を後に知った。極めて的確なアドバイスだろう。筆者はアンソロジー参加者すべてに脳天パラダイサーという奇妙な色を塗りたくろうとしていたのだった。寺西は後に詩学の編集部に入って、オーソドックスな誌面で地道に展開し続けてきた詩誌「詩学」を一挙に若手に向けて開放した。「ああ、寺西はおれと同じことをやりたかったんだな」と筆者は思った。しかしオーソドックスなところでそれをやるのは自爆するだろう、と踏んでいた。他人のやることは客観的に見えるが当事者となると状況が理解できない例に関しては以下に示したい。

２-４　幻の企画『王様ＰＯＰ詩集』

当時はまだ「現代詩手帖」も「難解な現代詩」というニュアンスを残しており、「ミッドナイトプレス」もまだその軽みに花を咲かせていない季節であった。後にミッドナイトプレスの岡田幸文が深夜まで飲んだある日「平居さん、僕は『脳天パラダイス』がライバルだと思っています」と言ってくれた。関西からのこのこミッドナイトプレスのパーテッイに出かけて行った筆者に対する最大のリップサーヴィスだと当時も今も思っている。しかし100％そうとも言い切れないのは、「元山舞を『脳天パラダイス』に誘ってもいいでしょうか」と僕が言った時「平居さん、そ、それはデリケートな問題なんだよね」と岡田が言ったことだ。その警戒こそ『脳天パラダイス』に対する最大賛辞だと僕は思った。

出版社や企画社（者）が他社（者）の侵食を警戒するのは当然である。後に『脳天パラダイス』のメンバーと思潮社系の若い詩人たちを合体させて『王様ＰＯＰ詩集』というアンソロジーを筆者は別途構想していた。「ビジュアルPoemを探して」という、「現代詩手帖」上に丸２年連載した企画が終った時期に、参加者を手帖誌上で募集した。当然のことながら編集長の小田康之の承諾も得て，初校まで上がって来た。ところが、それから何年経っても次に進まない。参加予定者の一人だった田中庸介も心配して編集部に同行してくれたが、埒が明かない。後になって思えばきっちりと交渉記録を残しておいて、正面から法に訴えるという手もあったかもしれない。しかし当時は当社との信頼関係を前提とした交渉・作業進捗なので、逐一記録など残してはいない。それに、のらりくらりに付き合うのに業を煮やしてついに、ゼロ年代の最後あたりに手打ちにした。「もういいです」という気持ちになって継続交渉を断念した。初稿が出てからすでに７，８年が経っている。その当時は何故こんな嫌がらせをされるのかと思ったが、後になって考えれば、ちょうどそのころに思潮社の若手シリーズが出そろっている。なるほど外様の人間にイニシアテイブは渡さないという、何か見えない力が働いた、横やりが入ったと邪推するしか考えようのない事態は逆に詩の王道＝思潮社（と僕自身は考えないところからそもそもこの種の企画は生じているのだが）からみた『脳天パラダイス』的世界＝平居謙的詩人把握に対する嫌悪を現わしているということに後年遅まきながら気づいたのだ。編集部内部によるものか参加予定者の内から上がった声か、それとも全く関係のない第３者か、今となっては闇の中で

ある。

僕はすでに草原詩社という小さいながらも自身のメデイアを有していたから、思潮社の態度に動じることはなかった。しかしもし、思潮社のいうことを静かに待ち続けていたとすれば、平居謙という存在は立場を失っていただろう。多くの書き手を束ね、その企画が引き伸ばされた上、お蔵入りするわけであるから。そのように考える時、詩書に限らず出版や芸術活動における編集者の真摯さというのは当該ジャンルを大きく左右するものであることを痛感する。其れは思潮社に限らず、他社でも似たり寄ったりである。ある時最果タヒ論に関する企画を別の詩書出版の社主に打診したことがあった。すると彼女は（その社が持っている詩の雑誌の）編集長に相談する、編集長から連絡すると言ったきり連絡が来ない。そしてその話は立ち消えになった。後に社主に改めて確認すると「編集長は連絡したと言っている」という。筆者は全て諒解した。そしてその「編集長」を心から軽蔑した。NO ならNO をはっきりと相手に伝え、生殺しにしない。もしかしたら別の場所でその書き手が花咲くことがあるかもしれないのだ。囲い込む発想を持つ出版人は臆病者の手合いである。

2- 5　草原詩社というコンセプト

『脳天パラダイス』で出会った書き手たちの中で継続的に詩を書くことを望む人たちを中心に詩誌「Lyric　Jungle」を創刊したのは 2001 年であった。第 1 号から 10 号まで長らく版元は『脳天パラダイス』シリーズと同じ鹿砦社であった。大量に配本するので大量の返本が鹿砦社に届いた。にもかかわらず鹿砦社は手ごたえを感じていたのか、このような詩誌までも流通に乗せてくれた。これには深い感謝の思いである。

そのころ筆者は大阪芸大で詩論という講座を持ち始めた。通信教育部であったために、年に数回のスクーリングを受講生たちは心待ちにしているようであった。社会人が多く、熱意に溢れていた。中でも際立って熱心に受講する一人の女性がいて、それが岩村美保子だった。年賀状か何かのためかと、別れ際彼女に僕の住所を伝えるとその後しばらくして詩の束が届いた。そこには詩集にして欲しいとあった。筆者は中身に関してはコメントできるが、本屋に流通させるのは難しいと告げた。が、それでも是非と彼女は言った。それでない知識を必死になってかき集めて、法務局にゆき当時最も簡単に法人化できる合資会社として登記し、流通会社を通して書店配本の手はずを整えた。確かその前に鹿砦社にも依頼したのっだった。たが、流石に無名の書き手の個人詩集を書店に流すのは負担が大きすぎると断られた。それではというので「草原詩社」と名付けて詩書を中心に編集・出版を行い、流通専門の星雲社に取次を依頼、若い書き手をバックアップするシステムを作り上げた。2002 年から 8 年近く筆者は京都で「ポエムバザール」という詩集・同人雑誌の交流即売会を開催したが、その折に若い書き手が泣いて「新風舎に騙された」と筆者僕に相談するのだった。ますます丁寧に個人の書いたものを読み、編集に当たらねばならないと覚悟を決めた。出版社の中には出版社とは名ばかりで、著者の持ち込んだ原稿を右から左へ大量に詩集を作るようなところもあると聞く。それがどれほどこの日本の表現を傷つけることになっているか、おそらくは分かっていないのだろう。

「草原詩社」が他の出版社とどのように差異化しているかについてここで語ることは控えるが、出版された詩集のリストとその質が、後々にそのコンセプトを明確に語るだろう。言語至上主義でもなく、社会派でもない。しかしその中間のどっちもつかずという層や身辺雑記という類のものが持ち込まれた時には、ご遠慮願う。筆者の中には「異次元ＰＯＰ」という理想像がある。理想と現実は異なるのであって理想通りの詩集が出せることはむしろ少ないが、理念としては確実に有している。それでは「異次元ＰＯＰ」とは何か。それは

① 日本語として無理なく読めるがそれでも解けない謎が残っている
② 難解な言葉ではなく軽みを帯びた言葉が使われている。文字通りＰＯＰ、跳ね上がる言葉。
③ 形而上性が存在する。異界への視角が感じられる。

の３要素を満たした作品である。本稿と並行して書いている『平成詩史試論』について先に触れたが、当初この書物の中で「自分がプロデュースした詩集を歴史の中に記述するなど変ではないだろうか」と遠慮するような気持ちになっていた。しかし人前に出せないような詩集ならば逆に言えばプロデュースする価値がない、と書きながら考えるようになった。そのため、「異次元ＰＯＰ」を湛えた草原詩社の詩集の作品について筆者自身が具体的に語るのは当該書籍を待つことにする。その代わり、客観的な立場から、本稿の共同執筆者である中村不二夫に、突き放した立場から次節で批評を乞う形をとりたい。（平居謙）

３　平成詩史における「脳天パラダイスシリーズ」「草原詩社」の功罪

３-１　平居謙の詩壇的立ち位置

本題に入る前に平居謙の詩壇的な立ち位置について書いておきたい。それを解き明かせば、必然的に「脳天パラダイスシリーズ」「草原詩社」関連作品について語ったことになるからである。それらの出版物は総合的に平居の身体の一部というより、出版人の枠を超えて、もうそれが平居の作品と化している。よって、「脳天パラダイスシリーズ」「草原詩社」作品を個別に論ずることより、平居そのものを取り上げることで、しぜんとそれらが内包する中身が炙り出されてくる。平居が筆者に求めたものとはちがう論旨になるが、ここではそういう方法を採りたい。

平居謙は自他ともに認めるアヴァンギャルドである。アヴァンギャルドと聞くと、筆者などは戦後の「列島」の詩人をイメージしてしまうが、平居はその起点を高橋新吉のダダイズムに定める。戦後になってシュルレアリスムは流行ったが、ダダイズムはその前段の地ならしとしてあまり顧みられず、あまたの西脇順三郎論はあっても、平居が論じるまで本格的な高橋新吉論はなかった。しかし、平居にとって前衛の核となるものは高橋新吉のダダイズムでなければならない。

平居謙の交遊関係で重要なのは、つねに現在に至るまで平居を支えている細見和之、山村由紀の存在である。この二人についてここで詳しく触れる紙幅はないが、印象として、二人はけっして平居のような立ち位置にはいない。細見は『家族の午後』で三好達治賞、『ほとぼりが冷めるまで』で歴程賞、『「投壜通信」の詩人たち』で詩界賞など、文学的業績も顕著だが、それ以上に筆者には立ち入ることのできない思想家乃至学者としての顔がある。大阪文学学校校長の重責も担っている。山村については鄒乃馨の精緻な研究論文「失われた存在への眼差しと共存　山村由紀詩集『呼』の藝術観光学的分析」、「『時間に埋もれた存在を探す旅　山村由紀『記憶の鳥』『風を刈る人』『青の棕櫚』解読」がある。いわば、いずれにしても、二人はいつ、どこにいても詩壇から正当な評価を受けられる実力者である。しかし、そこに平居が出てくると、細見・山村の正統性がはっきり分かる。これを野球たとえると、平居は俺流の監督、細見は頭脳派ヘッドコーチ、山村は俊敏な守備走塁コーチともいえようか。この平居を囲む二人の安定感によって、平居のアヴァンギャルド的冒険は安定的に保証されている。

筆者は巨人のＶ９時代、高校から大学がすっぽり入る時代を過ごした。その間、週末には草野球を楽しみ、住んでいた横浜から旧後楽園球場にはよく野球観戦で足を運んだ。平居ほどのこだわりはないが、第一詩集から、『ベース・ランニング』『ダッグアウト』『Ｍｅｔｓ』と野球関連のタイトル名を続けた。第三詩集時、メジャーリーグ観戦のため、何度かアメリカに足を運んだ。当時、ニューヨークでは老舗のヤンキースと新興のメッツが人気を二分していた。つまり、筆者は「現代詩手帖」に立

ち向かう「詩と思想」に模し、メッツを応援、よって詩集のタイトルを『Ｍｅｔｓ』とつけたのである。その頃、筆者の前に京都から登場したのが平居謙である。

平居の詩的活動は野球でいえばアメリカの独立リーグのような趣がある。ペナントレースを賞にたとえれば、そうした世俗的なことに関心が向かない。純粋に詩が好きだから、何物にも縛られず、ただ自由にやっていきたい。筆者がそんな平居をはじめてみたのは 1990 年頃だから、そこからゆうに３０年は経過しているが、何も変わっていないことに驚かされる。

前記の「詩と思想」研究会で、すでに平居は講師の度肝を抜くようなアヴァンギャルドの詩を発表していた。生真面目な講師たち、クリスチャンで大学教授の森田進、入沢康夫の言語主義の攻撃を展開していた佐久間隆史は、まるで異星人のような詩人の登場に何を評してよいのか戸惑ったであろう。佐久間は入沢のみならず、鈴木志郎康なども内的必然性のない言語遊戯と批判していたが、平居の前衛言語の範疇に入ると論評しようがない。佐久間は鈴木大拙 [*6] 全集を読破するなど、禅を重視、後期禅に行った高橋新吉に親近感を覚え、平居の詩に共感してしまったのかもしれない。森田の本質はエロスでもあったので、平居のエロス的表現を半ば肯定していたのかもしれない。筆者はこの不思議な化学反応を微笑ましくみていた。平居の身のこなしは京都人らしい柔らかい物腰で、微塵の尊大さも感じられない。つまり、平居は筆者も含め、講師人や研究会参加者たちに好意的に受け入れられ、だれもが平居の爆発力に感化されていたのかもしれない。もちろん、文学は遊びではないので、平居の中にも世の多くの人に評価されたい、認められたいという欲求は潜んでいる。しかし、それが外的な行動につながらず、つねに世の評価基準の外にはみ出し、一匹狼的な立場を優先する。ダダの持ち味は反道徳と非知性で、いわば世俗のルールと交わらず、というより否定することに意味があり、それを実践しているのだろうか。それでも、「現実には写真やイラストを使わず実験的な試行も極力控え費用を必要以上にかけたオーソドックスな形体の『詩集』が多く刊行される。これには理由がある。そうしないことには、『詩壇』内での評価が得られないからである。」(『可能性としての詩学』・2008 年・草原詩社) とあり、詩壇内の閉塞性に異議申し立てを唱えている。これまで筆者は、つぶさに詩壇の権威的現象をみてきたが、これでは戦前のように国家総動員法が発令されたら、みんな愛国詩人になってしまうのではないか、との危惧がある。

平居はその出発時、精緻な『高橋新吉研究』(1993 年・思潮社) を出版、その後私家版で博士論文「萩原恭次郎『死刑宣告』研究」がある。平居のアヴァンギャルドの守護神は、他に助けを頼まない自らの著書であるといってよい。

戦後「列島」などのエコールを読むと、ダダはシュルレアリスムに発展的解消したという見方がつよい。平居はダダの精神を手放すことなく、とくにダダがもつ反道徳、非知性を武器に、意図的に「脳天パラダイスシリーズ」「草原詩社」作品を作っている。それは視覚詩や図形詩と言うジャンルにつながっている。平居の試みは北園克衛以降の視覚詩とは似て非なるものである。北園たちのモダニズムはダダ固有の反道徳、非知性を放棄し、言葉をデザイン化することで、大衆迎合の形で世俗内にソフトランディングしてしまった。北園克衛たちによって、ダダは言語モダニズムの中で洗練されていき、当初の抵抗精神を失ってしまった。平居は日本の詩界にダダのレコンキスタ (失地回復) を目指しているといってよい。詩史的にみていくと、「赤と黒」「マヴォ」に拠った詩人たちの多くがダダを通過し、アナキズムにいき、それを受け「詩と詩論」「新領土」に拠った詩人たちがシュルレアリスムに交替変化していった経緯がある。戦後詩は「荒地」も「列島」もモダニズム批判が先行し、平居の書くような言語遊戯を許さなかった。そうした中、「夜の会」などで、「列島」や「詩と思想」系の詩人たちと親しく、みごとにダダの精神を開花させたのは岡本太郎の「芸術は爆発」発言である。岡本は「今日の芸術は、うまくあってはいけない。きれいであってはいけない。ここちよくあってはい

けない。」(新版『今日の芸術』) と強調している。平居は存在そのものがアヴァンギャルドである。９０年代以降の詩史の系譜において、どこにも類似した詩人がいない、もうそれだけで存在理由がある。

3- 2　平居謙と「詩と思想」

本来、平居にとって前記の理由などで「詩と思想」は相性がよくないはずである。「列島」の言語前衛を継承しているとはいえ、どちらかといえば反「現代詩手帖」の人生派や社会派を応援する立場にいて、平居の前衛詩法を諸手で支持する立場にはいない。かといって、言語前衛を標榜はしていても、すでに世俗の権威と親和性をもった「現代詩手帖」が「何を仕出かすか分からない」平居を受容するわけにはいかない。「現代詩手帖」は権威的であるが故に、見た目の言語は前衛ではあってもダダのもつ社会への抵抗精神は弱い。とどのつまり平居はそうした全国誌の中で居場所を発見できず、それで個人の出版事業の強化に方向転換していったのではないか。

ただ平居が折に触れて、1990 年代初頭、参加してくれた「詩と思想」研究会を母校のように思ってくれていることはうれしい。ここでは、バックナンバーから、いくつか平居と「詩と思想」の関わりついて書いてみたいい。

まず。1989 年 12 月号に前述した高橋新吉研究会の「甲板」の記事が出ている。第一回研究会は 1989 年 11 月 23 日、園田女子大学で開催されている。内容は平居謙の講演「新吉はどこへ行ったか？」、共同討議「現代詩における新吉の位相」。同時に「SUPER　ヤギダギヤ」を発売の予告。平居は研究会を立ち上げ、ダダの精神を詩界全体に広げて、詩をもっと万人に向けて解放することに狙いを定めたのであろうか。すでに『高橋新吉研究』の出版を視野において、進撃のための理論武装は整っており、あとは周囲に賛同者を集め、一大運動化することに集中することだけであった。この研究会の成果は分からないが、こうしてダダ的な研究会を立ちあげたことは評価に値する。

つぎに「詩と思想」研究会は、通常の対面での合評会に加え、随時シンポジウムや朗読会を企画した。1993 年 5 月 29 日、神楽坂エミールで「現代詩の未来を語る」というシンポジウムを開催した。パネリストは一色真理、佐川亜紀、柴田三吉、平居謙、柳内やすこで、司会は森田進編集長が務めた。パネリストの一人に京都から「詩と思想研究会」に参加する平居がいた。当時一色は 40 代半ば、それ以外は 30 代以下であった。まさに現代詩の未来を語るにふさわしい新進気鋭のメンバーであった。このシンポジウムについて、筆者が内容をまとめ、同年の 8 月号に掲載している。ここで平居は詩の未来に対し「詩の朗読、過去の詩の研究、自作詩の註解」を提案している。他の詩人たちの提案も記すと、柳内やすこは「詩の記録性の重視、日常詩の評価、預言的な詩的行為」、佐川亜紀は「消費的言語は無力、言語そのものに歴史的現実性を包括すべき」、柴田三吉は「生活から遊離した詩の難解性から、詩人の内に潜む現実否定を痛烈に批判」、一色真理は「詩のフォーラム (パソコン通信の活用)、異分子の吸収、朗読等によるパフォーマンスの実践」である。これらの意見を俯瞰してみると、平居は一色以外とはまったく意見が合わなかったかもしれない。一色と平居は電子メディアや朗読パフォーマンスで共通しているのだが、アウトプットする段でみていくと、一色は夢や集合的無意識を採用し、平居はアヴァンギャルドのダダ的姿勢を保持した。近くて遠き仲といってよいのか。二人は手を結ぶことはなかったようである。

1992 年という年度に注目したい。朗読パフォーマンスの活性化、電子メディアによるネット詩の出現など、パネリストたちの予察的提案が的を射たものとなって展開している。平居だけが過去の詩の研究を主張、その通り、現代詩研究者になって、前記の著書に加え『文学教育の新しい視点』(1994 年・朝文社)、『風呂で読む現代詩入門』(1999 年・世界思潮社) などの著書を出版していく。平居は

大学で近・現代詩を講じる一方、公序良俗に反するかのような反道徳、非知性的な詩を発表している。そこに矛盾はないのかという意見があっても当然だが、平居にとって、それはダダイズムの実践という概念をもって整合性があり、おそらく反道徳、非知性を放棄してしまったら、平居の存在由がすべて消えてしまう。だから、大学教授として虚構の仮面をつけるわけにはいかない。

「詩と思想」は2002年8月号で特集「言葉の木陰につどう　―ワークショップ特集 ―」を組んでいる。シンポジウムから 10 年が経ち、詩人の朗読、ネット詩、ワークショップはふつうになってきて、その報告がなされている。平居謙は長沢忍と対談「ワークショップ放談」、それにちなみエッセイ「『POEM バザール』のワークショップ的側面について」を書いている。この内容について触れる紙幅はない。2016 年 11 月号の特集「ポエトリーマーケット」で、「詩誌と詩集の手触りを求めて　―TOKYO ポエケット探訪記―」を書いている。2018 年 3 月号から 2 年間、読者投稿作品の選者を務めている。

平居の中で、詩的時間は規則正しく進化論的に進まない。高橋新吉と萩原恭次郎を現代にリニューアルした詩形を模索しているといってよい。高橋新吉の登場した大正末期、昭和前期のモダニズム、「荒地」「列島」の思想運動、言語遊戯の 60 年代詩、修辞的現在の 70 年代以降、無秩序なゼロ年世代詩、どこまで行っても平居は平居の詩で、まるで大正末期から時間が止まったかのようにダダの精神は健在である。

3- 3　平居謙の詩的位相

平居謙はどんな考えをもって詩界に挑んでいるのか。それは平居の著書によって自然と解き明かされる。ここでも簡単に触れておきたい。平居の理論工作は緻密にして大胆である。

『異界の冒険者たち』(1992 年・朝文社) の書き出しに、本著の主張が凝縮されている。

> 芸術の本資質を突き詰めていけば、≪異界≫の問題に即座に至るのは理の当然である。本著で紹介しようとするのは、芸術の本質へと突き進もうとするあまりに、思わぬ異界へと入り込んでしまったり、幻を呼び出してしまったりした、芸術家たちの魂の奇跡である。

そこから、吉増剛造、萩原恭次郎、ねじめ正一、粕谷栄市、北村透谷、萩原朔太郎、萩原恭次郎、高橋新吉、中原中也、高村光太郎、鮎川信夫などが論じられる。

平居にとっての詩は現実／非現実の二項的問題ではなく、現実否定の上に立った異界を暗示したものでなければならない。そういわれると、筆者などは冷汗が出てしまい、「そんな詩は書けない」と思ってしまう。詩の魂は異界に棲息し、身体は心ならずもプロテスタンティズム精神によって世俗に奉仕する。普通であれば、詩人と生活者は分別されているが、前述したように平居は大学教授と詩人の頭脳が一体化している。

『風呂で読む　現代詩入門』(1999 年・世界思想社) も新旧詩人を並列させたアイデアが抜群で面白い。ここは内容を紹介する紙幅がなく残念であるが、「詩と思想」など、このアイデアを借りて特集が組めるのではないか。

平居の詩集『行け行けタクティクス』(1990 年・白地社) は、新鋭詩叢書の一冊として刊行されたものである。奥付に平居以前に刊行された叢書参加詩人、田谷幸雄、中村伸樹、春日久男、沢木進、成田昭男、塩見邦夫、和田博文、萩原健次郎、黒村通、吉沢巴の名前がある。関西版新人叢書であるが、充実したラインナップである。筆者は刊行後、すぐに平居から恵贈されたが、その中にごあいさつと称した小文が挟まれていた。この一部に、つぎのような言葉があった。

日常雑記や回想記、また逆に言語遊戯的の作品が横行する中、曇天に走る一筋の稲妻としてのこの詩集をお楽しみ下さい。 1990 年 10 月

これを読むと、筆者と入口は違っても、出口は同じであることが分かる。平居は吉増剛造を、筆者は吉野弘を端緒に、詩が文学的価値を損なわず、万人に広く普及することを切に願っている。平居の分析と解説で吉増剛造の『黄金詩篇』[*7] が戦後屈指の名詩集であることが分かった。田村隆一のように戦後的事象に寄り掛からず、想像力のみによって完成させた言語世界は、たしかにノーベル文学賞候補に値するものであろう。なお、平居には『行け行けタクティス』の前に、大学時代に書きためられた『時間の蜘蛛』という私家版の詩集がある。

3-4　平居ワールドの開花とアンソロジー

ようやく本題にたどり着いた。それでも、またしても寄り道をせざるを得ない。ここでのアンソロジーもまた。平居ワールドの延長でしかない。

平居謙の詩集『無国籍詩集　アニマルハウス！絶叫雑技篇』(1996 年・思潮社) はすべてに規格外の詩集であるが、根底に高橋新吉の反道徳、非知性、萩原恭次郎の視覚詩、言葉の立体性などが渦巻いている。『基督の店』(2001 年・ミッドナイト・プレス) は聖性を拒み、あえて俗の極みにジャンプしてみせる。『春の弾丸』(2004 年・草原詩社) を経て、『灼熱サイケデリア』(2005 年・草原詩社) になると、さらにそれは極限にまで達する。

平居謙は政党でいえば山本太郎のれいわ新選組のような立ち位置で、詩壇内に評価を求めず、ゲリラ的に一般読者に詩の魅力を訴える。その象徴は『脳天パラダイス大詩集』 (1998 年・彼方社)、『脳天パラダイス特別大詩集』(1999 年・鹿砦社)、『脳天パラダイス豪華大詩集』(2000 年・鹿砦社)、『脳天パラダイス詩人大作戦』(2002 年・鹿砦社) である。

こちらも参加者の名前を記しておきたい。

1998 年 = 佐々木詠美、豊原清明、森河潤、上田假奈代、奥野祐子、小川てつオ、樋口えみこ、園子温、加藤あい子、魚村晋太郎、園田恵子、丸米すすむ、上村浩史、細見和之、平居謙

1999 年 = 森下朝子、豊原清明、かわじまさよ、矢板進、里宗巧麻、もりもとみちこ、広田泰、小川てつオ、奥野祐子、網野杏子、辻元佳史、魚村晋太郎、加藤和子、大村浩一、丸米すすむ、細見和之、森義久、園子温、吉荒夕記、平居謙

2000 年 = 川端理佳、河副広太、平崎佳代子、井上明久、安孫子正弘、大村浩一、森下あさこ、里宗巧麻、山村由紀、丸米すすむ改め特攻野郎Ａチーム、もりもとみちこ、広田泰、タケイリエ、辻元佳史、山中隆史、魚村晋太郎、上田假奈代、矢坂進、宮元眞美、野田祥史、荒川順子、細見和之、平居謙

2002 年 = 豊原エス、川口久美子、井上明久、森下あさ子、丸米すすむ改めもえのときめきイタリアンパスタＶ３、タケイリエ、野分紅、琴生結希、藤崎あいる、斎藤麗奈、山中隆史、野田祥史、宮元眞美、広田泰、網野杏子、大村浩一、奥野祐子、田中宏輔、辻元佳史、片岡直子、細見和之、平居謙

細見和之はじめ、荒川純子、豊原清明など全国的な活躍が知られる詩人も参加。園田恵子も大器として期待されたが、その活動が途絶えたことは残念としか言いようがない。大半の詩人は詩壇に名前

が浸透していない。それは無名ということではなく、はじめから詩壇内に評価を求めず、フラットな形で活動を展開したことに尽きる。ただ、園子温のように映画監督で名声を得た詩人もいて、他にも他ジャンルで名を成した詩人もいるにちがいない。90 年代以降、「詩と思想」が「現代詩手帖」を補完したように、平居謙のアンソロジーは三誌全体を相対化した形になっている。

その意図に触れておきたい。

> 本書には 1960 年以降に生まれた、比較的若き書き手たちの中から「こいつぁーイケる！」と確信したメンバーの作品を集めた。(略) これには一つには、この世代の詩人のものを集めることで、難解で鬱陶しい「現代詩」からフリーになれるだろう、という期待、というより同世代としての実感に由来している。参加メンバーの多くは、現代の詩を書いていても、括弧付の「現代詩」をやっていこうという意識は希薄なはずだ。（『脳天パラダイス大詩集』解説）

平居は現代詩の閉塞を鑑み、その根源的な縛りからの解放を提案し、それを具現化するメンバーを集めている。現代詩は 60 年代以降、言語モダニズムの成熟とともに内側に閉塞し、書き手 = 読み手の関係の中で、難解かつ面白くない詩を量産し続けている。おそらく、平居は大衆に向けて分かりやすい詩を発信しようとはしていない。アンソロジーの狙いは、難解であってもあらゆる技術を駆使し面白ければよい、読み手が直観でイメージを受容できれば意味を問わない、そんなところだろうか。そして、平居自身、それらの構想を主体的に最大化する存在である。いわば調教師と競走馬の二刀流で、詩という言葉のグランドを 24 時間ノンストップで疾走する。

平居にこれらを作らせているのは、高橋新吉の詩集『ダダイスト新吉の詩』[*8] にあり、かの有名な「DADA は一切を断言し否定する」に続く「神はオールマィティだとクライストが言った／ DADA は一切のものがオールマィティだと断言する。」というフレーズなのではないか。

この他、平居謙詩集『太陽のエレジー』(2012 年・草原詩社) は 1983 年から 2012 年までの詩が網羅されている。どこを読んでも、平居はダダイズムの精神を手放すことはない。

『燃える樹々』(2019 年・草原詩社) は、愛娘へのレクイエム 4 篇を含む最新詩集。東京の地図専門会社に入って活躍していた愛娘の急逝。28 歳 2 カ月の若さで、まさに異界に忽然と消えたことはどんなにショックであったろう。詩作を中断しても仕方のない不幸なことで同情を禁じ得ない。

3- 5 平居謙と草原詩社

草原詩社のコンセプトに詩壇的野心はない。一般に何らかの登竜門をくぐり、詩集を出版、各賞にノミネートされ全国に名前が知られる。これが出版社の商品価値を高めることになるが、平居の感性はいっこうにそうした方向に動かない。草原詩社の読書対象は詩壇ではなく、純粋な一般読者と詩人志望者で、賞につながる傾向と対策はとらない。平居の詩論に影響を受けた若手詩人も多く、未知の驚くべき言語世界が開示されている。それでは、平居がすべて異才のみを求めているかといえば、必ずしもそうともいえず、多種多様な若い個性が育っている。机の前に座って沈思黙考していては育つものも育たない。そうすれば、当該ジャンルは確実に廃れる。平居はそれを察知してなのか、ことのほか新人育成に力を入れている。

草原詩社から出版した詩集等はつぎの通り。

> 荒川純子『Viva　Mother　Viva　Wife』、秋吉里実『悲しみの姿勢』、岡村知昭句集『然るべく』、ちんすこうりな『女の子のためのセックス』、まるらおこ『つかのまの童話』『予鈴』、前田珈乱『風

おどる』『氷点より深く』、平居謙『燃える樹々 (JUJU)』『短詩系文藝四重奏 BOMB¡!』、川鍋さく『湖畔のリリー』、畑章夫『猫的平和』、木澤豊『燃える街／羊のいる場所』、春野たんぽぽ『赤い表札』、山村由紀『呼』、マダムきゃりこ『Rendez-vous』、恭仁涼子『アクアリウムの驕り』。

以下は旧草原詩社

岩村美保子『夕べの散歩』、佐々木果歩『ロプロプ』、冨岡郁子『H (アッシュ)』、河上正也『美術館へ行こう』、矢板進『近隣のキリンとその砲身の長さ』、網野杏子『あたしと一緒の墓に入ろう』、湊圭史『硝子の眼／布の皮膚』、丸米すすむ『剝離骨折』、イルボン『迷子放送』、谷口 -IZZY- 慎次『Love Song』、南原魚人『微炭酸フライデー』、ちんすこうりな『青空オナニー』、関根悠介『ぶひゃひゃひゃひゃ』

以下は荒木時彦の本

『静かな祝祭 - パパゲーノとその後日談』『フォルマ、識閾、その歩行』、『＜非＞の微侯、およびマテリアについて』

以下はトップランナーズ叢書　全３巻

辻元佳史『世界と戦う７つのレッスン』、平居謙『春の弾丸』、三沢宏行『青いペンの話』

以下は単行本

遠藤志野『オリツバメ』、尾崎与里子『城の町』、里都潤弥『空にからだの船、青く』、石川和広『野原のデッサン』、水上寿恵『春っぽい、』、足立和夫『暗中』、樋口えみこ『生まれて』、木澤豊『幻歌』、福島敦子『永遠さん』、瀬川佳代子『太陽と欲望』

以下はアンソロジー

『Lyric Jungle10』、『京都ダイナマイト！』、山村由紀『豊潤な孤独』、『Anthology2008』、『Lyric Jungle1　究極アンソロジー 2013』

平居から上記詩集が詰まった段ボール一箱が送られてきた。これらを詳細に読み解く紙幅はない。全体に新人を世に出すことを主目的にしているが、すでに全国的に名前が知られる荒川純子、樋口えみこ、大阪文学学校でチューターの経験もある木澤豊などもいて、必ずしも参加者のキャリアは一律ではない。ただ、平居の活動をリスペクトして集まったことだけは間違いない。これは岡田幸文の「ミッドナイト・プレス」のコンセプトに似ている。岡田の場合、根底にあるのはロックンロールとジャズ、いわば路上派的志向のつよい詩人たちが周囲に集まっていた。既成の出版に挑戦するという意味で、二人は固く手を結び、新興メディアでは東西双璧の存在であった。

ここでは新人育成のためのという視点から、上記詩人も含め、だれもが目を引くのはちんすこうりなの詩集であろう。ねじめ正一は、高良留美子はじめフェミニズム詩人の猛攻撃にあい、一斉を風靡したエロティシズムの詩を封印してしまった。高良は女性をモノ扱いするのが許せないという論拠であった。ねじめの実像は生真面目なジェントルマンで、権威的言動は一切みせたことがない。あくまで、フィクションとして書いていたのであって、それがだめと言われたら立つ瀬がない。ちんすこうりなの場合、女性側からねじめへの仕返しというのか、性をモチーフに女性上位の立場を作り上げている。高良から合格点をもらえるのではないか。ただ、そのアンモラルな世界を受容できないものは読者になれない限界はある。

その対極にたつのは秋吉里実『悲しみの姿勢』である。筆者も 20 代の 10 年、サークル誌で生活詩を書いていたので、こつこつ積み上げていく秋吉の姿勢は共感できる。栞に小学校の教師のコメントがあるのは微笑ましい。サークル誌にいたころ、鈴木志郎康や天沢退二郎に心酔していた仲間がいた。筆者は吉野弘で、この幅こそが詩のマーケットを広げる。平居には秋吉のような詩人を育成する

力が認められる。ちんすこうりながいて、秋吉里美がいる個性を最大限に評価してよい。

佐々木果歩『ロプロプ』は常識にとらわれない平居詩学の申し子のような作品。全面ダダ的な活字の躍動で刺激に満ち溢れている。2003 年刊で作者 20 代の作。草原詩社ならではの最高傑作といってよい。冨岡郁子は好対照で、しっかりした文学観を基礎に骨太の生活抒情の世界が広がっている。あとがきに筆者が敬愛していた朝比奈宣英の名前があるのがうれしい。川鍋さく『湖畔のリリー』は若い感性が対象をまっすぐに捉えていて微笑ましい。「寒さが痛いくらいの日には／玉ねぎを持って歩くといい／なるべく皮が厚くて／色の濃いものがいい」（「玉ねぎ」）などのフレーズ。川鍋は、90 年代以降に現われた若手詩人の象徴といってよい。いわば、詩人はどれだけ未分化の感情を拾い上げられるかが主たるテーマとなってきた。そこで使われるのは人工的な隠喩ではなく、無意識を動かすダダ的な瞬発力といってよいかもしれない。

すべてに触れることはできないが、平居の考える読み手を楽しませることでは草原詩社の詩集は群を抜いている。（中村不二夫）

4　平成期・令和初期における注目すべき詩人たち

4- 1 平成詩史における功罪

平成、令和は詩壇の失われた 30 年といってもよい。「現代詩手帖」は「荒地」の詩人たちへの依存がつよく、かれらを失った代償をなんとかやりくりして、穴埋めしようとしてきた。荒川洋治を旗手とする団塊の世代、井坂洋子、伊藤比呂美たちの女性詩、ポストモダンの「麒麟」、〇年世代と悪戦苦闘の末、彼らが期待するほどの新しいスターは生まれなかった。和合亮一、最果タヒなど、書店の棚をにぎわす詩人はいても、戦後詩が持っていた思想性が脆弱であった。いわば、「現代詩手帖」というエリート養成型システムが機能しなくなってしまった。少し前であれば、「現代詩手帖」の投稿欄に入選すれば、それなりのお墨付きは得られた。それは平居が選をしていた「詩と思想」も同じで、時代状況として投稿欄からは大型新人が出にくい。これは平居がよい見本だが、かつての詩人の多くは実作の他、詩人研究や詩史にも通じていたが、いつからか、そうしたことを総合的にできる詩人が少なくなってしまった。

ある意味、平成の詩壇は吉本隆明のワンフレーズに翻弄されたといってよい。『戦後詩史論』[*9] で荒川洋治以降の詩を修辞的現在といい、『日本語のゆくえ』[*10] では「現代詩手帖」系の若い詩人の名前を上げ、詩は無に帰したと言っている。まるで吉本だけが詩壇の格付けの権利をもっているようだが、郷原宏などが消えた無風地区のそれだから仕方がない。最近、野沢啓は復活したが、一時期、郷原のように詩壇から離れていた。平成の詩壇は、能力ある批評家を消してしまう負の圧力があった。

なんでもできるが、すべて平均以下の結果であれば、実作を極めたほうがよいし、この世界で上位に立つにはそれ以外ない。平居の場合、実作至上型であるが、職業上、詩の研究活動が伴うし、詩人の出版活動は批評の一形態とみて差し支えない。そこから、本テーマの新鋭詩人発掘というところに向かったのであろうか。

これまで「現代詩手帖」「詩と思想」「詩学」「草原詩社」から出た新人をみてきた。はたして、ネット詩や個人誌などをみていくと、この外にどんな詩人が隠れているのか。そこは平居謙の平成詩史の完成を待つしかない。

平成以降に限っていえば、すでに述べてきたように「現代詩手帖」一誌をテキストに論じるのは適当ではない。別の意味でいえば、日本現代詩人会や日本詩人クラブという結社がノミネートし、選出する詩書も同じで、そこには会員投票という歴然とした堅牢な壁がある。ノミネートには会員相互の贈呈ということが前提にあり、どんなに著名な詩人の詩書であっても、贈呈数が少なければ、会員投

票で上位に行くことはない。そういう詩人たちの詩書は、高見順賞や詩歌文学館賞、萩原朔太郎賞、高見順賞や現代詩花椿賞などに流れていった。つまり、詩人たちには当該受賞を読み手として共有できるものがなく、それぞれがそれぞれの場所で自己満足に浸るしかない。そんな偏向した詩書が一般読者の心を掴めるわけはない。ほぼ、それらは詩学学会での顕彰という形式的セレモニーで終わってしまう。

筆者は全国誌や結社の改革ができる立場にいたにもかかわらず、そうした閉塞性に抗うことはできなかった。せめてもの抵抗は、ある時期から、各賞の選考する立場は留保するにしても、賞レースに向け、静観するようにしたことである。平居は「草原詩社」というノンブランドを立ち上げ、世代を問わず新たな才能を発掘しようとしている。

たとえば、仙台の秋亜綺羅が「ココア共和国」という月刊詩誌を発行し、そこで秋吉久美子賞というのを設けている。こうした流れこそが、詩を一般読者に帰すための積極的な行為である。秋の詩誌を読むと、かつての「月刊ポエム」や「詩とメルヘン」のような趣があって、とくに平居のような強烈な個性に支えられてはいないにしても、一般読者を軸にしている点では共通している。

令和の時代、吉本隆明の偏向した論拠をいったん封鎖する必要があり、一方で「現代詩手帖」「詩と思想」は前例を踏襲した編集をしていれば、どんどん時代から淘汰されていってしまう。いわば、一般読者は現代詩そのものに興味を失ってしまっている。その代わりといえば、だれもが競ってカルチャーセンターなどで書き手を生み出すしかない、そうした内部の悪循環がまかりとおっている。平居の大胆な試みは、読者に寄り添い、こうした内部閉塞のメカニズムに飲み込まれていないのがよい。

4-2　平成期・令和期における注目すべき詩人たち

平成・令和で注目を集めた詩人は、これまで名前を上げた詩人たちの当該活動の軌跡を追うことで説明できる。しかし、それは別のテーマとなり、とうていそれらについて触れる紙幅はない。ここでは、平成期に新人という登竜門を抜けた詩人で、とくに印象に残った詩人を記してみたい。第１回中原中也賞の豊原清明詩集『夜の人工の木』(1995 年・霧工房)。当時豊原は１８歳。豊原は小学６年生の終わりから、伊勢田史郎 (1929-2015) の文章教室に通い、それは高校２年生まで続いたという。よって、この詩集の 32 篇はその間に書き溜めた数百編の中から、解説の伊勢田とともに選んだものである。伊勢田との交流を書いた「低い声」という作品も収録されている。豊原は登校拒否児として一般の学校に通えず、伊勢田に励まされ成長し、中也賞受賞に至った。伊勢田は阪神・淡路大震災でいち早くアート・エイド神戸を立ち上げ、大震災のアンソロジーの刊行など、震災復興に力を尽くした詩人しても知られる。その後豊原は『朝と昼のてんまつ』『時間の草』『父子』『白黒目』『手話する冬鹿』『白い夏の死』などの詩集を刊行している。

高畑耕治は初期「詩と思想」研究会出身で、第一詩集『死と生の交わり』は 1988 年刊行。90 年代に入り、『海にゆれる』『愛 (かな)』『愛のうたの絵ほん』を経て、２１世紀詩人叢書「さようなら」を刊行。同詩集は日本詩人クラブ新人賞の最終候補まで行った。高畑は大阪出身で早稲田の政経学部中退。初期研究会で高畑ほど熱心に講師の話に耳を傾ける詩人はいなかった。その後、なぜか詩壇の道を離脱、一般読者に向け、ネット通信などで独自な活動を展開している。2000 年以降の詩集は『こころうた　こころ絵ほん』『銀河。ふりしきる』『純心花』。平居のいうダダとはちがうが、高畑は確実に中也のダダイズム精神の影響を受け継いでいる。それが身体現象に現われ、既成の秩序を拒み、詩の仲間にも与せず、徒手空拳で万人に通じる言葉の発信となっている。高畑は大学を中退、豊原同様、退路を断って選んだ究極の場所として詩がある。

土屋智弘は初期研究会出身の井村たづ子の紹介で知り合った。静岡県詩人会会長、第 72 回Ｈ氏

賞選考委員を務めるなど、詩壇内の仕事もしっかりこなしつつ、独自の幅広い活動を展開している。1992 年に第 1 詩集『悲しき熱帯』を刊行、やや遅い出発の団塊の世代。第 2 詩集『クローンの声』は詩劇にちかく、その資質はロルカやギンズバークなど吟遊詩人にちかい。モチーフは母の死を通しての生命記憶への問いで、解剖学者三木茂夫の胎児の世界とシンクロナイズしている。その背景には、人がクローン化していくことへの不安と批評が潜んでいる。いわば、土屋は詩を介しクローンではない真実の自分探しの旅に出かけた。その言葉は、目の前の一般読者と直結し、必然的に戦後の思想詩にありがちな意味の分析や解釈を要求しない。戦後の詩劇というと、サルトル的な不条理劇、人間の深層心理を描写した前衛劇となるが、土屋の詩劇は人間の＜真善美＞に訴えるリアリズム調である。ダンテの『神曲』の読後感に通じたものがあり、ここまでのスケールで長編詩を書ける詩人は少ない。以降、『永遠の人』『ラ・マンチャへの旅』などを刊行。他に劇作家としての活躍も目覚ましく、地元を中心とした舞台上演も多い。それにちなみ、『掛川座　ぼくのシネマパラダイス』という回想記も出版している。

初期の「詩と思想」研究会参加者の中島悦子の活躍は目覚ましい。「叢書新世代の詩人たち」の第１詩集『Orange』以降、第三詩集『マッチ売りの偽書』でＨ氏賞。『藁の服』で小熊秀雄賞。詩論、詩人論研究も多い。他に放送大学非常勤講師などで現代詩の啓蒙に力を尽くしている。

苗村吉昭は第一詩集『武器』(1998 年･編集工房ノア) で福田正夫賞を受賞すると､その後も『バース』で小野十三郎賞､『オーブの河』で富田砕花賞を受賞する他､『民衆詩派ルネッサンス』『民衆詩派ルネッサンス　実践版』(日本詩人クラブ詩界賞特別賞) の刊行、編著として『結核に倒れた小学校教師　中村正子の詩と人生』などもある。苗村もまた、読者不在の要因となっている言語派と人生派の統合をめざして、実作、評論、研究に実績を積みあげている。

佐相憲一は 1968 年横浜市生で苗村より一つ下である。早稲田大学政経学部卒業、アジアや旧ベルリンなど世界各地の放浪､帰国後､日本では数種の肉体労働に就労。熟講師を経て出版の仕事に携わり、現在文化企画アオサギを設立、主に若い世代の出版活動を支援している。第 1 詩集『共感』は 1997 年刊行。第 3 詩集『愛。ゴマフアザラ詩』(2002 年。土曜美術社出版) で小熊秀雄賞。以降も、『永遠の渡来人』『心臓の星』『港』『時代の波止場』『森の波音』『もり』などを刊行、近刊詩集は『サスペンス』(2002 年・文化企画アオサギ)。佐相は日本詩人クラブ理事長、「詩人会議」副委員長を経て、現在横浜詩人会会長や小熊秀雄協会代表。インターネットラジオやＮＨＫラジオ「深夜便」に出演するなど、懸命に詩の普及活動に務めている。詩誌「指名手配」には若手の詩人が多数収録されている。平居の草原詩社に通じるものがあり、平居や苗村とともに現在の詩界を支えるエースの一人といってよい。佐相もまた、高畑のように退路を断って詩人という仕事を選択したことになる。

1987 年代、鈴木比佐雄が詩誌「コールサック」を創刊。それが出版事業の展開となって、原爆や大空襲、反戦などにコミットした社会派アンソロジーなどを多数出版している。鈴木の持ち味は思潮社や土曜美術社出版販売と競合しない書き手を結集し、それが朝日新聞などのマスメディアの心を動かしていることである。鈴木の活動をみると、出版主体も詩壇外に移りつつあることを実感させられる。一色真理は「詩と思想」編集著を退任後、為平澪を協力者にモノクローム・プロジェクトを創立した。そのコンセプトは現代詩を手にとりやすい価格で市場に展開することである。詩誌｢モノクローム」創刊号 (2018 年 7 月) は斬新な編集で、ポエケットなどで販売されたという。こうした二人の活動は平居の草原詩社にも通じるものがあり、これに佐相のアオサギも加え、今後の出版動向に注目していきたい。（中村不二夫）

00　おわりに

本稿は詩人･批評家である中村不二夫と連名でなされた。既に繰り返し触れたように､中村は詩誌｢詩と思想」の元編集長であり、日本詩人クラブ顧問でもある。その他さまざまなところで現代詩の現状を見続けてきた「詩史」を考える上で欠かすことのできない人物である。

筆者・平居は中村に一世代遅れる形で詩の時代を過ごした。自分自身が関わっている領域に関する「史」を記述する場合、ややもすると自身の活動に対して過大評価を与えたり逆に過小評価にとどめたりする可能性がある。それを防ぐための手だてとして、中村に客観的に全体を素描してもらうという意図もあった。「新鋭詩人発掘」という語をタイトルに入れたのは､「はじめに」にも触れたように、東京の詩壇と接点を持ち得たのは、中村をはじめとする「詩と思想研究会」によって鍛えられたという意識が強いためでもある。また、それを雛形にするように筆者自身が後に、文字通り「新鋭発掘」とでもいうべき仕事を誰に強いられるともなくやり続けて来たという意識も関連しただろう。

大枠を構想して中村に共著論文を依頼。夏を過ぎて執筆部分擦り合わせの際に、平居に対する中村の過剰な評価に触れて冷汗をかく思いがした。一方でそれを「過剰評価」であると考えることはむしろ批評家・中村不二夫に対して礼を失するとも考え、高い評価を差し引いていただくことを敢えてせずに掲載した。この評価に値するためには、筆者自身が実践で今暫く創作の現場をかき回すしかない。が、このことに関しては本稿で詳述すべき類のことではないだろう。（平居謙）

【註】

1　井手則雄、沢村光博、相沢史郎、村岡空たちの出資によって土曜社を設立、1972 年 10 月創刊。
2　城左門が詩誌「ゆうとぴあ」を改題、1947 年 8 月創刊。
3　「文章倶楽部」「世代」を編集していた小田久郎によって 1959 年 6 月創刊。
4　北川冬彦たちによって 1950 年 1 月に創設。
5　西條八十を代理事長に 1950 年 5 月に創設。
6　世界に日本の禅文化を広めた仏教学者。
7　1970 年思潮社刊。第二詩集。
8　1923 年 (大正 12)2 月、中央美術社刊。
9　1978 年 9 月、大和書房刊。
10　2008 年 1 月、光文社刊。

（なかむら　ふじお　日本詩人クラブ顧問）
（ひらい　けん　平安女学院大学国際観光学部）